

四 すさみ町藤原城跡の中世考古資料

中世考古資料

佐藤純一 SATO Junichi

はじめに

藤原城跡は、和歌山県西牟婁郡すさみ町に位置する中世期の山城である。古くから城跡の存在はよく知られていたものの、その内容は長らく不詳であった「すさみ町誌編さん委員会一九七八」。近年、堀口健武氏により詳細な遺構の報告がなされ、城跡の様相が明らかにされてきた「堀口二〇一五・二〇一九」。その後、白石博則氏による調査報告もなされてきているので、参考にしたい「白石二〇一八」。

今回、藤原城跡を踏査する機会を得て、曲輪Ⅰにおいて中世期の資料を表面採集したことから、その内容を報告する。

一 藤原城跡の位置と概要

藤原城跡は、周参見川河口部を中心とする平野部の背後の山塊上に位置し、藤原谷がその名の由来と考えられる。最高所は、標高二七四mを測り、麓からの比高差が約二六〇mある。岩肌が露出する険峻な山である。周辺に立地する周参見城跡、周参見中山城跡、神田城跡とともに周参見氏が築いた城館と考えられている¹⁾。

近世以降に成立した『安宅一乱記』の「角ミ木弾正が事」における「藤原の要害」に比定されるが、同時代史料からは周参見氏の動向を含

めて、詳らかではない。「藤原の要害」は味方の逆心により炎上したのちに、再度普請されたと伝わる。

藤原城跡は、南の曲輪Ⅰと北の曲輪Ⅱとそれらの間の曲輪Ⅲ、尾根筋の堀切・堅堀で構成されている(図1)。

曲輪Ⅰは、三〇m×二六mの平面長方形形状を呈し、四周を土塁で囲っている。土塁は、両側を石積みで補強する。虎口は、堀口氏や白石氏が指摘しているとおり東側に開口すると想定される。北側の開口部については、後世の改変(小祠とそれに伴う石積み)が著しいため、評価が難しいが、曲輪Ⅱとの連絡や曲輪Ⅲの南端部の土塁の状況から出入口として機能していたとみられる。曲輪Ⅰの南西部の土塁には、櫓台と評価される高まりがあり、位置的に海上交通を見張る役割を担うであろう。こちらからは、国指定天然記念物の「稻積島暖地性植物群落」を含めた周参見湾を睥睨する。

曲輪Ⅱは、城跡の北端部に位置し、周参見川の平野部を直下に見下ろす。三〇m×一五m程度の不整形な長方形形状を呈するが、岩盤により居

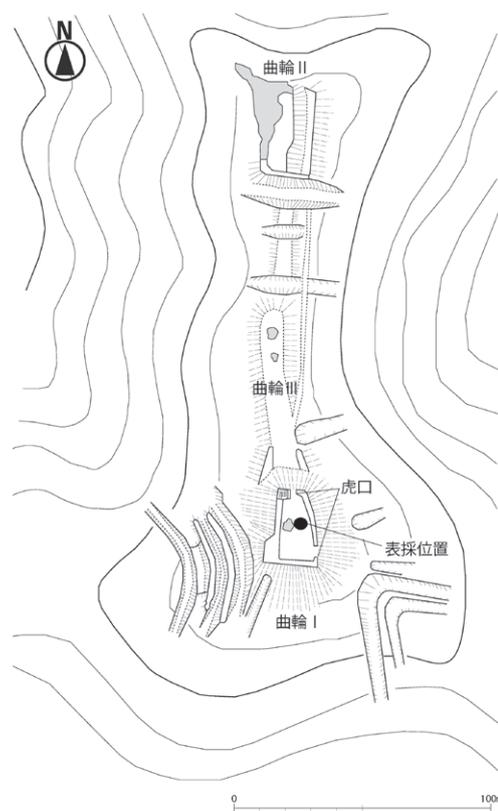


図1 藤原城跡 縄張図
(白石博則氏作図を元に筆者作成)

住スペースは大幅に限られる。周参見中山城跡や神田城跡を望むとともに、安宅坂や大辺路街道、周参見荘の内陸部や佐本荘へ向かう道を一望できる。ただし、こちらからは周参見湾及び周参見川河口部が見えない。曲輪の北側及び西側は自然地形の岩盤により土塁状になっており、南側の土塁に接続する。西側に土塁は存在しないが、切岸となっており、帯曲輪もしくは通路状遺構が存在する。こちらの南端部にもやや甘い土塁を築く。自然地形を利用しながらも、明確に平坦面を確保し、切岸を備えている。

曲輪Ⅲは、削平が甘く、自然の尾根筋とみえなくもないが、付帯する土塁や堀切から人工的な曲輪とみなしても大過ないだろう。曲輪ⅡとⅢの間は三重の堀切で遮断しているが、曲輪Ⅱ側の堀切がもつとも傾斜がきつく、比高差が5m以上ある。

藤原城跡の特徴的な遺構として、曲輪Ⅰを防御する西尾根と東尾根の堀切群が挙げられる。西側尾根は三重の堀切と石積み土塁を築く。尾根の高低差を上手く利用することにより、堀切の比高差がより大きくなり、遮断の効果を大きくすることができる。堀口氏が指摘するように、隣接する安宅荘の勝山城跡との構造（築城技術）上の類似点が認められる²⁾。

藤原城跡の曲輪Ⅰ（南郭）と曲輪Ⅱ（北郭）が、それぞれ海上交通と陸上交通・河川・平野部を抑える機能を有していたとみられ、勝山城跡と同様の役割を担う城跡と捉えることができる。

二 遺物の観察

今回採集した資料は、石臼類（挽き臼類）の下臼である。

復元残存長（白面径）一六・〇cm、残存高四・〇cm、復元芯孔径が上部で三・五cm、下部で四・五cmを測る。残存率は四〇%である。白面は

全体的に破損しており、すり溝はまったく確認できないが、あたかも八分面の区画であったかのような破砕面が形成される。受け皿部は、先端が欠損する。

受け皿を持ち、小型であることや芯孔棒が貫通しているといった特徴から、いわゆる茶臼と評価できる「三輪一九七八」。全体に火を受けた痕跡が認められるが、二次的な被災、もしくは儀礼的な破砕の一環として火中した可能性がある。

全国的にみれば、様々な石材が用いられているが、地元産の石材が主となるようだ。本資料も、周辺でよく産出する砂岩製である。茶臼の出土は、十六世紀代に増加する傾向があり、本事例もその年代観に属するならば戦国期の所産とみられる「佐々木二〇一八」。

発掘調査事例が蓄積されている史跡安宅氏城館跡においては、八幡山城跡と要害山城跡で茶臼が出土している。八幡山城跡では、上臼一点と

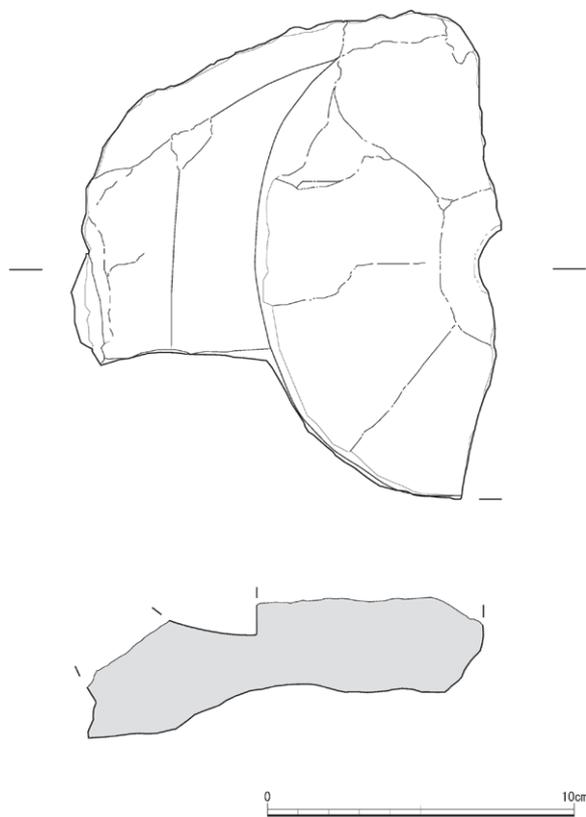


図2 茶臼 実測図



写真1 茶臼



写真2 表採位置 (写真中央)

下白五点の合わせて六点が出土している「日置川町教育委員会・安宅荘中世城郭発掘調査委員会二〇〇四」。要害山城跡では、上白が一点確認されている「白浜町教育委員会・安宅荘中世城郭発掘調査委員会二〇一四」。この二例の中世山城については、他の出土遺物から、十五世紀後半から十六世紀初頭の年代に機能していたことがわかっている。類例が少なくはあるが、本事例の年代観と矛盾するものではない。

また、白石氏の報告によると、今回の報告資料以外の石臼類が確認されている。茶臼の下白のようであるが、今回の踏査では確認できなかった「白石二〇一八」。

おわりに

本資料は、これまで出土遺物の報告がなされていない藤原城跡の年代観を議論するうえでひとつの指標となる。ただし、石臼類は、一般的に時期比定のための編年資料となる遺物とは言い難いため、今後さらなる資料の報告や調査が進展することを祈念して、ひとまず報告を終えたい。

本報告にあたっては、和歌山城郭調査研究会代表白石博則氏よりご教示いただいた。末筆ではありますが、記して感謝申し上げます。なお、本資料については、本稿作成後、すさみ町教育委員会（すさみ町立歴史民俗資料館）に寄贈する。

図1は、白石二〇一八に加筆修正、図2及び写真1・2は、筆者が作成した。

注

(1) 城館の概要については、本報告書中の拙稿「熊野水軍が築いた城館―史跡安宅氏城館跡を中心に―」及び白石博則「熊野地域の港津と城館」を参照されたい。

(2) 白石によると、藤原城跡と勝山城跡の築城技術上の類似は認めつつも、安宅氏・周参見氏間のみ技法ではなく、紀南で広く有効な技法として共通認識されていたものとの指摘がある。筆者もそれに賛同する。ただし、立地や城館構成などを含めた視座より確認される勝山城跡と藤原城跡が果たした役割の共通性については、強調されるべきものと考えられる。

引用参考文献

- 佐々木健策 二〇一八「挽き臼類の展開にみる中世」『国立歴史民俗博物館研究報告第二二〇集「共同研究」中世の技術と職人に関する総合的研究』村木二郎編
- 白浜町教育委員会・安宅荘中世城郭発掘調査委員会 二〇一四『安宅荘中世城郭群総合調査報告書』
- 白石博則 二〇一八「藤原城跡」『和歌山城郭研究 第一七号』和歌山城郭調査研究会編
- すさみ町誌編さん委員会編 一九七八『すさみ町誌上巻』
- 日置川町教育委員会・安宅荘中世城郭発掘調査委員会 二〇〇四『八幡山

- 城跡』
堀口健武 二〇一五 「藤原城」 『図解 近畿の城郭Ⅱ』 城郭談話会編
堀口健武 二〇一九 「藤原城」 『戦国和歌山の群雄と城館』 和歌山城郭調
査研究会編
三輪茂雄 一九七八 『白』 財団法人法政大学出版局